

## 畳の上で、時間生物学を考える。

遠藤 求<sup>✉</sup>

奈良先端科学技術大学院大学 植物生理学研究室

私は靴が苦手だ。さらに言えば靴下も苦手だ。決して裸族ではないのだが、靴と靴下はどうしてもダメで、足元が拘束されている感がたまらなく不快である。酔うと所構わずに靴と靴下を脱ぎだしてしまうし、会議などが少しでも長引くと靴を脱ぎたくなくて仕方がない。その点、畳は良い。靴を脱ぐのが自然だし、ゴロゴロしても構わない。何たる開放感。昼下がりに横になりながら論文を読むなどは至福のひと時である。靴を脱いでいるという事実だけで、新しい発想が出てくるような気さえする。

しかし、独立前の身にとっては畳敷きの部屋を作るなど夢のまた夢であった。そのため、私にとって自由な研究環境とは、研究テーマの選択の自由や義務的な仕事の少なさだけでなく、靴・スリッパからの解放を意味するようになった。

2016年に奨励賞をいただいた際にも、将来は畳のある研究室を作りたいという野望を語った(図1)。その後、あちこちに応募はするものの中々うまく行かな

い日々が続き畳への思いだけが募っていたが、独立の機会は、2年後に訪れた。

前職の京都大学から南へ40km、車だと京都市内から1時間ちょっとの場所に現職の奈良先端大は位置している。学部を持たない大学院大学であり、私の所属は正式には「奈良先端科学技術大学院大学先端科学技術研究科」と漢字が24も連なる長大な名称を持つため、所属名称が枠から飛び出し、手書きに時間がかかるなど大変である。また、「先端科学」の文字が2回も繰り返されていることからわかるように、最先端のことをしようという意気込みから名付けられた名称ではあるが、「奈良の先端に位置するから」という冗談も中々に説得力があると思う(図2)。

異動してすぐは、色々な申請待ちや電源工事などすることが無い。その間を利用して、私は自由な研究環境の象徴としての畳部屋を作り始めた。ホームセンターに買い出しに行っては作業し、また買い出しに行くということを繰り返し、約2週間で畳部屋が完成し



理想の居室 イメージ図

- ・モノが少ない
- ・掘りごたつ
- ・周りは畳

図1 受賞の際に使用した理想の居室のスライド。



図2 奈良先端大の位置。京都・大阪・奈良の県境付近の学研都市の一部として25年ほど前に作られた。文字通り、奈良県の先端に位置している。最近、近くに理研もできた。



図3 作成途中の大学院生室。奥の壁はホワイトボード塗料を塗って、ホワイトボード化した。

つだ。作った当人ですら、「味がある」だなんて思っちゃいない。色々と状況が許すなら、業者に頼んで作ってもらった方が良いものができるだろう。しかし、予算5万円で作れと言われれば、最高クラスの出来栄えと言っても良いと自負している。

研究にも似たようなところがあると思う。特に新米PIにおいては、時間的、金銭的、場所的、人的な制約から、必ずしも最善の方法を利用できないことも多い。しかし、そういった中でも、組み合わせ方や視点などをちょっとズラすなど、自由な発想をすることで、欠点が欠点でなくむしろメリットになったり、全く新たな展開が待っていたりする。論文を読んでいても、やられた・すごいと思う論文は、金のかかった大規模解析ではなく、ちょっとした工夫が大きな成果をもたらしたものが多い。「これなら私もアイデア次第では、出来たかも」という気持ちだけでなく、そういった論文にある着眼点のユニークさや物語としてのおもしろさに惹かれているのだと思う。もちろん、畳の部屋を作っただけで、そうした魅力的な研究ができるとは思っていないが、自由な発想を生み出す雰囲気を醸成する効果が少しでもあるといいな、とは思っている。実際、異動してから始めた新しい研究もいくつかは面白いものになりそうであり、畳の効果だとほくそ笑んでいる。

また、畳部屋を作る上では、もう少し周りから抵抗されると予想していたが、実際にはそういったこともなく、学生だけでなく研究室外の人たちにも面白がってもらえている。この点においても、今回の経験は研



図4 完成した大学院生室（著者：中央奥）。

究と似ていると思う。大抵のことは実際にやってみると考えていたよりも簡単だし、ちょっとした思いつきであってもフットワークを軽くしてトライしてみると案外にうまくいく。こうしたことを考えると、畳の部屋は自由な研究環境の象徴であると同時に、限られた条件の中でも最大限工夫し、フットワーク軽く取り組んでいくという、私たちの決意表明でもあるのだなあと、畳の上でぼんやりと考えたりなどした。

現在、植物系の新学術領域は5つあるが、そのうち3つまでもが当学の教員が代表を務めている。少しレベルの高い人と付き合うのが一番成長できる、などと言われるが、それは成長過程にある人の話であり、私のような伸び切ったゴムのような者にとっては、こうした大先生たちの中で揉まれても、ますますヨレヨレになってしまうだけではないかと不安にもなる。

しかし、伸び切ったゴムですら思い切り引っ張ればまだ伸びる余地があるのだ。私もまだ伸び代があると信じるしかない。まずは、足を靴から開放し、畳の上でのびのびと手足を伸ばすことから始め、じっくりと将来の研究の方向性に思索を巡らそう。この部屋が私自身の研究の象徴となるよう、魅力的な研究を行っていききたい。

なお、原状復帰のことについては全く考えていなかったもので、みなさまも部屋を改造する際は気をつけて下さい。